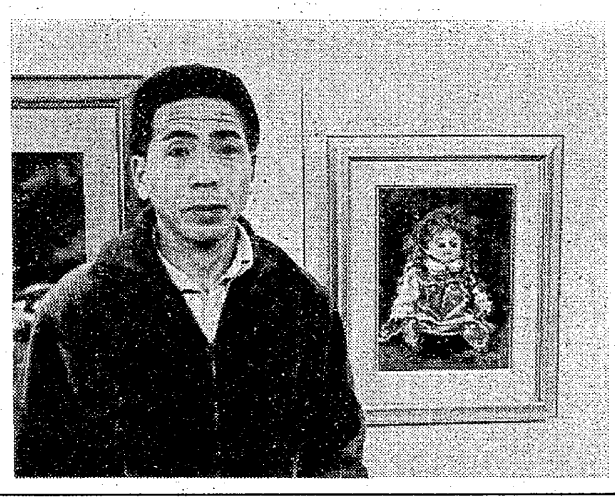
大牟田美術展に姉川さんが出品

一月二十九日から二月二日まで第三十回記念大牟田美術展が、労働福祉会館で開かれました。この美術展に姉川良男さん（二十七分会・港務）は洋画部門の審査員として参加されました。

作品　「港」　30号

宮脇さん（18分会（三川））も入賞果たす

作品　「人形」　6号



57年度退職者の説明会を、玉名で

例年、定年間近な組合員を対象に、厚生年金・炭鉱年金・雇用保険などの説明会を行なっていますが、本年は、二月二十一日（日）玉名の紅葉館で行なわれます。対象者は昭和五十七年四月一日から昭和五十八年三月三十一日までの退職予定者です。くわしくは分会にお知らせしています。

職場新聞活動を再確立しよう

春闘での前進めざし、28日に担当者会議

八二春闘は、深刻な経済不況・消費低迷・実質賃金の低下の中で、私たちの生活と権利を守るために、強力な闘いが求められています。

賃上げ、一兆円減税、反核・平和、行革などの課題をどう闘うかは、まさに労働者と労働組合にとって、今後の存在価値が問われる重要な問題でもあります。

このような情勢下で、職場の闘いを進め、支えるうえで職場新聞活動は、きわめて重要な意義をもっており、職場新聞こそ闘う武器だといっても過言ではありません。

いま、一定の活動が続けられていますが、現状は必ずしも情勢に見合うものになっておらず、苦労は多いが、その割に反応が少ないという声もあり、憂慮されています。

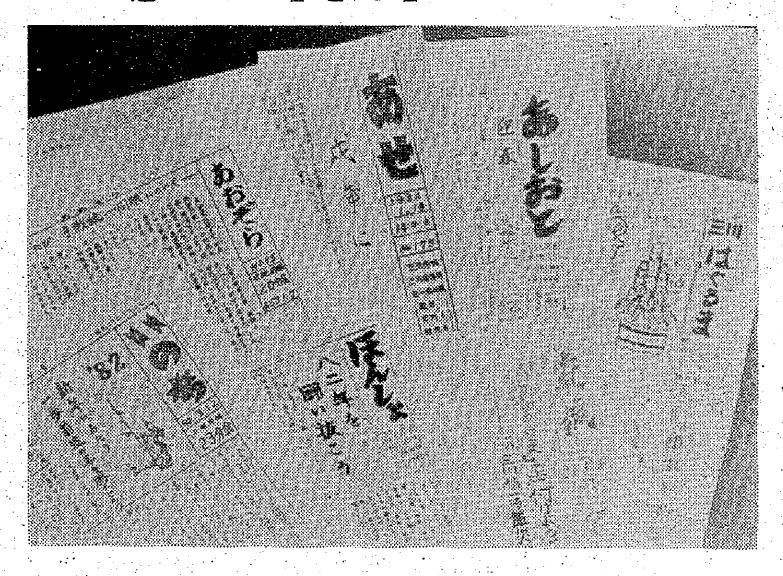
職場には、さまざまな問題が山積みしています。保安のこと。環境のこと、賃金のことなど、不満や要求もいっぱいです。

本来、職場新聞活動は地道で目立たないものですが、職場になくてはならないものとして、その役割を担わなければなりません。春闘を目前にして、今までの足跡をふりかえり、経験を確かめ合い、教訓を学ぶことが重要です。それは必ず、三池労組の団結と三池炭鉱に働くすべての労働者の共同事業に大きな貢献を果たすことになるでしょう。

今回は、とくに春闘に焦点を合わせ、全職場で発行し、発行している分会は、さらに先進的役割を果たすことを目的として、担当者会議を開くことにしています。

日時　二月二十八（日）
場所　荒尾労働金庫二階

なお、くわしいことは分会を通じてお知らせします。



編集部に寄せられた職場新聞新年号

豆まき雑感

19分会（三川）　前川哲也

二月三日、節分を迎えて会社（三川鉱）は、初めて豆まきを行なった。その理由は、保安確立にむけての保安意識の啓蒙とのこと。

表面的な取り組みとしては、うなずけるものがあり、その時点では豆まきを通じて〝保安〟の二字を思いだした労働者も少なくなかったであろう。しかし、労働者の働く現場は、豆まきを行なっただけでは良くなってはいかない。災害防止への具体的な努力と、すみやかな実行こそ求められているのである。

三池労組は、豆まきでは保安確立への対策にはならないとして、作業現場の改善、保安法規の遵守が先だとして、豆まきの行事をボイコットした。しかし、三池労組の態度としてこれだけでいいのだろうか。〝保安への教育・啓蒙運動〟としての会社の対策なら、私たちも啓蒙運動にもっと積極的に取り組むべきだ。

例えば、昇坑後の豆まきではなく（午後四時から十分間だった）各方繰り込み時に、入坑時間を十分遅らせて豆まきを行ない、保安への取り組みを積極的に教宣し、さらに現場の労働者の具体的な声を、一人一要求として発言できる場所を設け、会社には、労働者の意見を聞く場所をつくれと要求すべきだ。このことが生きた保安への対策となる。

会社のやることに意見が違うからとボイコットするのではなく、会社の行事を利用して、より進んだ具体的要求を出し、労働者の共感を呼ぶ行動をやるべきだと思う。

手記

小崎さんを送る

二十分会（三川）　町佳郎

歌いくつ作り偲ばん雪の夜を汝がし文

編みし機関紙をかたえに置きてきれぎれの思い出のみ淋しすぎゆきの汝をとらえんと心沈めぬ

うすかりし交わり憂う浮びくる歌多からずペン握りつつ

私はかって機関紙「みいけ」に次のような歌を載せてもらったことがある「齢なれば機関紙の編集辞すという机に寄りて物書く人の尊く」。組合で編集にたずさわっている小崎さんのひたむきな姿に心打たれたからである。

編集の仕事は総じて地味なものであり、目だたない存在である。しかし内実、はげしい職場闘争におとらぬほど、多くの面できびしいことも事実である。「みいけ」の編集に従事して十五年、その多くのきびしさを理解することは不可能だろう。ある意味ではそれは小崎さん個人のきびしい長い孤独な闘いであっただろうと思う。

しかし、その任を着実にまっとうされた。去年の暮れの慰労会の席で、長い間のご苦労に対するねぎらいと、今後へのはげましが、多くの仲間によって語られた。

個人的につきあいの薄かった私にとっては、機関紙がある意味での小崎さんとのつながりであったかもしれない。機関紙を通して、多分働く仲間たちに毎回送られる暖かいメッセージは、私にとっても励まされることが多くあったと思う。

これまでの小崎さんのことを思い浮かべながら、断片的にではあるが歌にまとめてみようと思う。これらの歌のいずれかにでも、小崎さんを惜しむ多くの仲間たちの気持が重なってくれれば幸いと思う。

編集の職務を辞した今は、潤いの時間の中で来し方を静かに振り返り、また明日への希望を抱きつつ、日々ペンを走らせておられることと思う。

最後に、七十歳をこえられたいま、健康には十分注意され、ご自愛くださるよう、心からお願いしたいと思う。

細りゆく組織目守りて十五年ペンもて仲間らを勇気づけ来ぬ

職新を育てんとつね励みいき講習はいくたび受けたりわれも

COの告発つづくる機関紙の特集も百九十七号となりぬ

細りたる身を机に寄せて編集に余念なかりきつねわれは見き

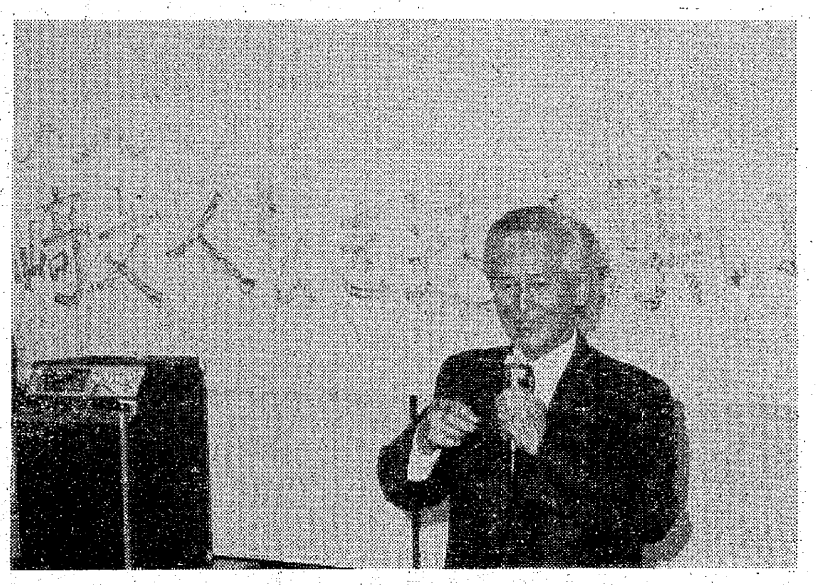
ゆるぎなくつらぬかれし汝が強き意志反権力弱者をつねいつくしみこまごまに編集の助けを借りたるとあつきことばに語るおみなは

職新の編集に使えと自（お）が日頃用いし立案百科を賜（た）びぬとのも降る雪おやみなし更つ夜を汝を思いつつ窓辺に寄りぬ

×

〈訂　正〉

本紙前号の短歌『映秋初冬』の七首目、最後の「開き始めたり」は、「開き初めたり」です。訂正しておわびいたします。



12月20日、「小崎氏を送る集い」で